
獣の咆哮

そらぼん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獣の咆哮

【Nコード】

N5421Z

【作者名】

そらぼん

【あらすじ】

未来、こことは違う世界の未来の街。栄えるはずのなかった企業や人物が大成する世界。この日本に存在しなかった場所にある街、綾谷新都にある？守院で暮らす一人の青年「要」はある日自分を救い助けた人の親友であり、自身の親役であり恩人の企業の重役「白谷・楠雅」に呼び出される。そこで語られた短く信じなければ消えてしまいそうな非現実的な話、そしてそれを聞いた帰り道に彼は悲鳴を聞き、好奇心から現場に向かう。そこで現実とは違う、ありえない現象に出会う。そして向かっていくのは十二年前に起こった大

序章、風の運ぶ夢

ずっと孤独は、寂しいから。



晴天。道に風が吹き、アスファルトに乗った紙切れが舞う。

空を見れば雲が流れ、潮の匂いのする風にのって鳥が飛んでいく。しかし空は遠く。視線を遮るのは高く、天高く立ち誇る灰色の山だ。

この広い道の先、湾の中央に置かれた島を包むように建つビルの群。それはまさに悪魔の住む岩山に見えた。

色とりどりの看板や旗が風を受けて鳴り、人が喧騒と共に行き交い車が走り抜けるこの大通り。

その道の中を一人の青年が歩く。

今時珍しいほどに質素な格好、逆に目立つということもない彼は少し長い黒髪を風に吹かせて歩いている。古めの黒いコートとそこから突き出た長く健康的な太さより少し太い足は白の浮き始めたまだ新しいジーンズで包まれている。

彼は黒い瞳を前へと据えて、人の波を超えていく。

やがて大通りを抜け、人もまばらな道へと入る。

彼は前を止めていないコートの懷へ手を入れ、それもまた黒く光る二つ折りの端末を取り出す。それを開くと、携帯電話とは違うボタンの配置。そしてホログラムのウィンドウが浮き出てくる。

端末の液晶から放射状に広がり、数センチ上に表示されたそれを端末自体についたボタンを押し操作する。

表示されていた物がいくつか消え、表示されたのは小さな地図。

綾谷市／新都と書かれたそれは街の名前のようだ。

彼は道を抜けてまた大きな別の道に出ると、今度は地図を消して

名前の出ていたウィンドウを拡大する。

『君を引き取ってからもうすぐ十年、あの時まだ小さかった君がもうすぐ成人になるというのは親代わりの私たちにとっては喜ばしいことだ。そこでだが私達からの贈り物と、そして頼みを受け取って欲しく思う。三月の二十日三時頃に新都喧騒街外れの白谷IIPMセンタービルへ来てくれ。』

宛名には？^{いすもり}守・^{かなめ}要と名が書かれ、差出人は白谷IIPM管理局長と書かれている。

白谷IIPMは、この街の復興に一躍買った三つの財閥の一つだ。そもそもこの新都綾谷は政府の地方復興計画の没案としてあったものを、当時強大な資本を持っていた三つの財閥「白谷」「青桐」「縁堂」が資本を出して無理に作り上げた物だ。

そして三十年前開発が始まり、現在列島の中心あたりの海沿いに広がる隔離された平野に出来上がっているのがこの新都。実権は政府の役人と当時から突出した技術と開発力を持っていた青桐グループの者たちが持っている。

そして今彼にメッセージを送る白谷は、情報処理系で伸びたグループだ。PCソフトや携帯端末の開発を主軸にして様々な研究を行い、また奉仕活動などの先頭を切っているものでもあった。様々な場所に孤児院を作ったり、寄付やボランティア部の創設と活動などが最も目立っている。

その白谷に引き取られ、新都に建てられた管理局の長の私的な施設に入れられたのが彼、？守 要だ。

彼はメッセージを画面から消すと、遠くに見える看板と目立つ建物を目印に二つ目の大通りを歩く。

通りには黒ではなく茶髪に金髪、中には緑やピンクに染めた髪の人も歩いている。これは新都の流行なのか、世間全般がおかしいのか。

先程の通りよりは人の少ない、企業街とも言えそうなビルの通りの中に建つそれは白い外観。周囲のビルよりも頭一つ高く、他は通

りに直に入口を置いているのにそれだけは前に広場と通路が設けられている。変わりに通りに面した場所にあるのは様々な色の花の咲く生垣、そしてそこに建てられた時計。彼が目印にしていた看板はその脇の壁に。

質素で無骨なそれには、白谷統合情報処理機構管理局ビルと書かれている。

要はその脇を通り、入口を潜ると受付に会釈しながらその奥へ。

豪華なホテルのようなロビーにある大きな前面に押し出された階段の裏、そこにある社員用エレベーターは時間もあり意外に空いている。五つある中左端の物に入り、右前のボタンから42階を選択して扉が締まる。

大きなGを感じながら昇り、止まることなく到着したエレベーターを出る。

ロビーの感じとは逆に質素で無機質なそこは、台車が入れ違えるだけの広さの通路に六つの扉と、先にもう一つ扉。その一つだけは隠れようとしながらも耽美な風情を醸し出す。

両開きのそれに迷うことなく足を運び、ノックする。

「入ってくれ」

しわがれた、しかし威圧感と硬さのある声が響く。

失礼します、と答えて黄金色の取っ手を掴み、右側を開き入る。

軋みを上げることなく滑らかに開いたそれをゆっくりと戻しながら、前方へと体を向ける。

そこはけっして無駄に広いわけでもない部屋。下にはワインレッドのカーペットが敷かれ、壁には棚が並び、隙間の壁から模様の入った壁紙と子供の書いた絵が見える。

右側にはもう一つの扉があり、恐らくは秘書やお茶くみがあそこから出入りするのだろう。

中心には古めかしく価値のありそうな大きい机と、座り心地のよさそうなソファが並んでいる。その机の上には、大きな箱。

そしてその奥、大きな机の前に立つのは白髪の老人だ。

禿げの兆候すらない生え揃った長髪を後ろへ流し、鋭い獣のような瞳と細い眉を露にしている。顎からは長めの髭が伸び、今時珍しいこれもまた古そうな苔色の着物の胸元まで届きそうだ。

「久しぶりだな、要君」

「お久しぶりです、白谷・楠雅さん^{しろや・くすまさ}」

楠雅はそのシワだらけながらも威厳ある顔を笑みに歪める。

大きな執務用の机から数枚の資料と印鑑を手に取り、中央の木机に寄ってソファに座る。

「まあ座ってくれ、きつと長い話になる」

「わかりました」

若干緊張した面持ちで要は楠雅の対面のソファに座る。見た目通りもつふりとした感触で要を包み込んでくる。

快楽に身を委ねながら、楠雅の話を聞く。

「さて、君に話したい事が二つ程あるが。その前に」

机に置かれた黒い箱を両手で持ち、要に差し出す。

「君が私と出会い、それから施設に入った日が来月の今日にちょうど十年になる。そのお祝いを少し早いが、受け取ってくれ。」

大きさは両手を縦向きで並べて上に置いて、肘までの三分の二を包み込んで少し余る程。

重さはそこそこで、受け取った瞬間重さで落とすことはない。

渡して、一度息を吐いてから楠雅は両膝に手を置き、その琥珀色の瞳を要に向ける。

「これから話すことは君にとって、私にとってとても重要なことだ」

要の少しハネた髪が風もないのに揺れる。

「その前に——君は、この街のことをどれほど知っている？」

「街、新都のことですか」

「ああ、綾谷と呼ばれた過去すら思い返させない程に発展したこの街の事を。」

知っていること、と小さく考えながら呟く。

「三十年前頃に政府が出した地方都市復興法案で、余りにも非現実的だと否定された計画を、当時の三大企業が全面的に行うというありえない取り決めで行なった街。漁業と稲作程度しか行われていなかった綾谷平野の湾部に行政用の島を造りそこから発展させた。住宅区や研究区、工場区や企業街喧騒街などの商業区に、元々のまま残された漁業区や農業区がある。現在は空中道路が中外問わず張り巡らされている。昔は三分化されていた行政や権力も縁堂がほとんど手を引き、白谷が一度低迷してからは青桐の独壇場になっている。中央の巨大な塔は現在世界最高の建物で1200mを超えている。警察が他にくらべて——」

「ああ、それだけ出るなら十二分だ。」

目を閉じて聞いていた楠雅が腕を組み、渋い顔で口を開く。

「さて、では暗部は知っているかな？」

「暗部？」

「青桐が独裁化してからのことだ。」

数秒沈黙が落ち、部屋の端に置かれた柱時計が針の音を立て、扉の対面に広がる大きな窓から射し込む光が少しづつ二人に届き始める。

「かつては薬品開発などが主だったあやつらが、人体実験を始めたことは？」

「聞いたことも」

「警察に金だけでなく、新都に置ける地位なども賄賂として差し出していることは？」

「耳にしたことすら」

「私設の軍を隠し持ち、誘拐や破壊活動を行いさらに隠蔽していることは？政府の要職の連続死が実は彼らによって起こされたことは？今の総理の腹心と密接な関係を持っていることは？数年前流行った疫病が彼らから漏れたウイルスによるものということは？数年前の大火災が彼らの謀反者によるものだということは？そして——」

これらが漫画や空想の中ではなく、本当に現実なのだとしたら。それはありえない話だ。一企業に支配される街というのもかつてはありえなかったろうし、軍を隠し持つなんてことは出来るはずもない。ましてや事件を起こしていれば確実にバレルだろう。

しかし老人の目は真剣で、嘘偽り無いことを伝えている。

いや、例えそうであつても信じられない。

「そんなことが、あるはずないです」

「父親がわりで、相当な地位の相手に対して否定とは凄いな要君
イヤミではないよと告げて話し出す。

「これらは裏付けの取れている事で、しかし訴えても事実とは認めてもらえない事だ」

「それは、そうでしょうね」

「だが、事実だ。」

言つて、一枚の紙を手取る。

信じることはできないが、それでも本当にあることなのだというのはわかってしまう。少なくとも要は彼に会ってから、虚言を聞いたことなどなかったから余計に。

「とりあえず、今まで言つたことを事実だと仮定して聞いてくれ」

「——信じます、信じますよ」

「——。そうか、ありがとう」

手に持った紙を要に向けて、机の前に置く。その手はシワがよっているが、色も若々しくいまだ現役だということを強く主張している。

「さて、私たちはそれを知った。捨て置けない暴挙、最初は私も信じなかったが裏付けも取れてしまい、逃げ場はなかった。そして会長であり我が心友の白谷・夏尚しろや なつひさと共に額を合わせ話し合ったのが、十五年前だ。」

白谷の低迷は十八年前、その三年後ということは白谷グループがまだ弱っていた頃だ。

「私たちは困つたよ、何せ訴えかけようにも力が無い。売り場と

して良いこの綾谷に研究者から引き抜いた、信頼できると言った私をよこしたものの力及ばずだった。」

しかしあの馬鹿者は見過ごせないと言ったのだ。

だからと前置きして、組んでいた腕を再び膝に置く。

「そこで彼は提案した。抵抗勢力を作ればいいのだと。それが出たのは話し始めた一年後だ。私は言ったよ、子会社を作りその社長が勝手にやったらとすれば白谷に影響はないと。そして出来たのはIIPMだ。名は同じものの青桐も同じように別系統として同じ名の物を持っている。問題はなかった。」

その話で要には予想できなかったが、恐らく第三者が居るなら即座にわかっただろう。

楠雅は膝を叩き、爛と目を光らせ要を見た。

「そして作り上げたのだ、行き場のない者達の行き場であり、不満を持ち抗いたがる正の意思を持つ者を集め、自ら願いだ兵を集めた軍を。」

「……軍。」

「対等な罪をかぶり、言い逃れできない悪となった。私達は自ら名乗る、偽物の悪だ。」

そしてこれが君への願いだと言う。

「君に力を貸して欲しい。嫌ならば嫌だと言えればいい、しかし私は悪だからな。ここまで育ててもらって拒否は無いだろう？と暗に示しているぞ」

「言えば、それはないのと同じでは？」

「逆に重圧にもなるさ」

「願う答えは」

「受託であり、拒否だ。」

二度目の沈黙が落ちる。

「時間は？」

「三日間待とう」

「それだけあれば。」

目線で意味を伝え、最低限の言葉を交じ合わせる父役と、多の中の一の子役。

きつと楠雅は苦悩したはずだ。わざわざ送られた物を仕事場に貼るほどだから。

子への愛。

偽物でもそれはあるのだろう、共に過ごしたわけでもなくともあっただろう。

それがあるから、急かせなかった。

「今日は帰ってくれていい、二つ目は三日後話そう。」

「ええ、では」

ソファを立ち、祝いを持って扉に立つ。

そこで同じように立ち上がり、真逆の方へと向かった楠雅から声。

「鈴深が、参加している」

「鈴深が？」

「ああ、私の若き友人であり、君のもう一人の父役であり兄役が。」

言葉を交わして、そして数秒。今度は左の扉を開き出ていく。

扉が閉まる。音はない。

静かな部屋。



まだ夕焼けには早い時間、先程は人の多かった道も今はほとんど見えない。

歩くのは企業街ではなく庶民的な商店の並ぶ道。さすがに旧世の商店街ほどではないが、近い物はある。大型のスーパーの集合地はこの通りにはなく、企業街からそのまま放射状に行った先か、湾を超えた向こうの方にしかない。

「……………たかつ？……………ウムはま……………！」

「……………や……………化け……………なっ！」

紙袋に野菜を入れて歩いていく黒い服の彼は不意に立ち止まる。

「……………悲鳴？」

確かに細く怒声と悲鳴だ聞こえてくる。

しかし首を突っ込む問題ではない、そう判断する。

目の前で起これば行かない訳がない、例え遠くであつても行かない事はない。

しかし声は複数だつた。若い女の声だけではなく中年の男の野太い声も、若い男の声も聞こえた。それはきっと演劇か何かの声だろう。行くだけ無駄だ。

それでも聞いた間に数分がたつていた。

そこに靴音を鳴らして近づく少年がいる。

「お？要ー、何してんだ？」

「ん、颯太？」

颯太と呼ばれた少年。赤い乱れた短髪と翠色の瞳、顔立ちに少し外国の血が出ている。背は決して高くないが、彼も要と同じように結構な筋肉を付けている。

襟の立つたジャケットに包まれた腕の先をポケットに入れながら、近寄ってくる。

「買いた物か？荷物になるなら持って帰ってやろうか」

「ん」

要の脇に立ち、少し低い背の差のせいで少し見上げながら話す。

颯太のポケットの中で、バイクのキーがチャリ、と鳴る。

「ちよつと待ってくれ、颯太。」

「何か、気になるのか？もはや癖だな」

「正義漢じゃあないんだけどな」

「トラウマ的なやつか」

細く聞こえた悲鳴が、少し大きくなっていた。

そして響くのは、少女の悲鳴。

「……………じゃ、頼んだ」

「あいよー、気を付けて」

慣れたように会話を交わして、要は少年の傍らから駆け出す。放られた紙袋をキャッチして颯太は手を振って歩きだした。路地裏に、鳥の滑空のように滑っていく。



土地が広く、さらに徹底して建築を支持することのない新都の路地は入り組んでいる。

中世の街の路地のような生活に必要な道ではなく、ビルの土地の問題から生まれた隙間の道が大半で、不良や犯罪者の通り道になっている。

それは喧騒街や住宅街ほど顕著で、今いる場所はその二つの中間あたり。

右へ、左へ、カーブする道を走って、また折れる。

声は途切れない。単なる喧嘩ならすぐに止むもので、それなら要もすぐに帰るのだが、今は何故か怒声も罵声も悲鳴も消えない。

今この路地を迷っていないのは要が必死に道を覚えたからだ。それは努力の証拠で、特に位置感覚が人より優れているわけではない。兄役の、とある尊敬する人が言った言葉が、彼を走らせる。

泣き声無視する奴は人じゃねえよ、と。

放置されたゴミやビールの箱、企業が捨てたのか大きなプリンタ―を踏み台にして飛ぶ。

少しずつ大きくなる声。

数十分走ったかもしれない、日が傾き茜色に空が染まり始める。

走り続けて、声の方へ走れば路地を抜ける。ゴミの高く積まれた細い路地を抜けると、周りはガラス張りの建物や、耽美な装飾の建物の多い場所。恐らくは高級住宅街の近くか。

そういった場所ならば逆に昼間か、夜が更けてからでないと人はほとんど見られない。すぐに帰るような人間か、逆に忙殺されている人間ばかりだから。

しかし今は違った、路地を出たところで太った男に腕をつかまれる。

しまった、と思ったときには遅く、太い腕で地面に叩きつけるように倒される。

住宅街なのに喧騒街の大通りのような広さの道路を、十数人の男女が散らばり這うように何かを探している。

太った男は豚のように白い肌を要に密着させながら、低くぐもった声で問いかける。

「おまえ、追って来てただろ？誰だよ」

「——っ」

武道でもやっているのか、肩の関節をきめられている。しかしそんなことよりも、ただ出てきただけの人間を地面に倒すような人間と、恐らくその仲間がどうしてこんなにいるのか。

不良集団でもない。服装は研究者のもので本来外で見ることでそうそうない。

——楠雅さんの言ってた軍？

いや、確かに否定はできないがならばこんな格好ではなく普通のシャツやズボンでいいではないか。白衣を着ている必要はない。

それに何かを探しているということは、研究していた動物でも逃げ出したのか。

「おい、見つかったか」

「いや見つからない、そんなに体力はないはずなのに」

「焦るんじゃないよ。あいつは必ずその辺にいるんだから」

「で、でも、もし見つかったことがばれたらあの人たちに、に」

無効で走って来た男に4人ほど向かっていく。話す内容からしてあいつというのが目標で、こいつらはそれを研究してるやつらだ。そしてあいつ、というモノが逃げ出した。

今自分に向かってきているのは一人だけで、他は逃げるようにほかを探してる。携帯で電話していたり、他の路地を見回っていたり。要の推測では、格闘出来るのはこいつだけで後は普通の研究者だ

ろう。

全員肌も白く、細い者が多い。

そこでギリギリと肩に力を込められた。

「お前黙ってるんじゃない、何か話すんだよ。どうして追ってきた！全部知ってるってのか！？おい！」

「おい、どうした節夫。そいつがどうかしたのか」

向こうで話していた青年がこちらに気づいて歩いてくる。まだなつてばかりなのか健康的なことが好きなのか、にわかスポーツマン程度の体つき。

——もしこいつも参加したら、逃げることも悲鳴の原因もわからない。

結局、走ってきたのも正義感ではなく好奇心だろう。それにこいつらが怒りあっただけではないはずだし、悲鳴を上げた名残もない。そこで、近くから悲鳴が上がった。

「美智子の声だ！」

「うひょっ？」

太った節夫と呼ばれた男の注意が逸れ、力が抜ける。腕を捻り、脂肪のついた手から払いながら抜けでる。

「あっ」

「正当防衛パンチっ！」

節夫の脛を裏拳で殴り、転がり起きる。

声にならない叫びをあげながら崩れ落ちる節夫、それを見ながらも先程の悲鳴に気を取られている男と、周りのヒト達。

転がり起きたところでまた声があがる。

それは逆方向から。それもあがるというほどの大きさではなく、ただ偶然近かったから気づいただけの声だろう。

「——————いや——————！」

気づけば、突っ立っている男を弾き飛ばして駆けていた。

短く声をあげて倒れる男を尻目に、先程通った路地に飛び込み積まれた5mは軽いゴミ山を蹴り崩す。塞がれた通路の向こうで男二

人がのたうち回っているだろうが、それを知らぬとばかりに走る。
数十秒、今度も同じような道に出る。

完全に紅に染まる街路、ガラスが反射して光輝く街は紅くライトアップされた水晶の街のようで。

その中に佇む白銀の少女も、いやおうなしに美しく見える。

大きな瞳、小さな唇、白いクリスタルを糸にしたような輝きを放つ髪を風に吹かせている。纏った白い布切れも彼女を引き立てるだけで、千切れていることも気にならない。

それだけ美しいのに、表情からは感情が読めない。恐怖を感じた表情でもなく無表情。

露出した手も足も素のまま、白い人形のような肌は赤く腫れている。

風で髪が舞い、胸元に置かれた黒い紐で繋がれた黒い、木の実のような形の宝石のペンダントが揺れる。

突風の中彼女は両手を胸に当てて、薄い唇を開く。

そこまで、一秒と、少し。きっと彼女が、声の主。

「――助けて！」

声を聞いた瞬間には、体ごと振り返っていた。

彼女の向かいには先程と同じ格好の、今度は体つきの違う男たち。全員が獲物を持っている、しかし危険だとわかるが止まらない。

全部で4人、一人大きく前に出ていた長身の男が要にパイプを振り下ろす。

「っ！お前ら女の子につ」

体を逸らして避ける。全力でやったのか地面に叩きつけ、反動じ腕を震えさせる。

「こんな人数で」

拳を握って、一発。

「何しようとしてやがったっ！」

脇腹に直撃、痛みが伝わったのか口から唾液を漏らしながらよるめく。追撃で空いた脇と腰にも拳を入れる。

手から鉄パイプを離して、体を抱きながら倒れ込む男。
それを見て少し恐怖したのか、三人立ちすくむ。

「お、俺達はそいつを連れ帰らないとダメなんだよっ！」

「研究材料なんだっ、どこぞの小僧に！」

背の低い男と、細い長身が二人踊り出る。手には同じように鉄パイプと――

「刃物っ！？」

こいつらはなんなんだと必死に考える。

考えなくても、言っていた言葉でわかる。こいつらは研究者であ
の子を捕まえようとしている。

傷つけながら。

許してみてるなんて、したくない。できなくはないが、したくな
いから。

「――らっ！」

突き出して来た刃物を避け、横に回る。

側面から顔を殴る。漫画のように吹き飛ぶわけではないが、怯んだ
相手から刃物を落として蹴り飛ばす。

そこで打撃。それは放ったものではなく受けた方。

肩口に衝撃が走り、転がる。

「邪魔をするなよどこぞの野郎、仕事をしてる人間とそうじゃね
ーやつの違いは責任だ」

もう一度細身の男が振りかぶる。

繰り返した。足を振る、先には急所、狙って当てるのは難しいが
慣れれば簡単で、うずくまるしかないような痛みが走る。

脛に衝撃、二度三度と繰り返して、先程の節夫と同じように。

「くひあかつ！？」

鉄パイプを落として、奇声をあげて倒れ込む。

先程殴った男は打ちどころが悪かったのか、泡を吹いている。
正当防衛、過剰防衛に入るかは微妙なラインだろうか。

「……そうですっ！変な男が邪魔をして！ええ！地区の三番街

です！」

最後に残った男は電話を手にして怒鳴っている。
つかつかと近寄って、取り上げる。

「くっ、き、貴様！名前を言え！」

「電話繋がってるのに言っでどうする」

「貴様……っ、貴重な被験体アルノウムをどうするつもりだ！」

「アルノウム……？」

「……！そ、そうだ！あの少女は貴重なのだ、返すなら、今なら逃がしてやらんでもないぞ？もうじきこっちに触れたお前を殺しに――」

「来ているぞ――、一人ではあるがな」

「！？」

突然聞こえた声に驚きながら、視線を上げる。

夕焼けの中に影、銀髪の少女よりも長い髪をなびかせて立っている影だ。

腰から二本づつ、細長い物を組らしきもので携えている。ひとつを手にもって。

「さて、お仕置きと威嚇をしておくかな」

気が付けば、目の前にいる男の後ろにそれは立っている。

「なんっ！？」

だ、まで言えずに、少女のいたはずの場所へ後ろ向きに駆ける。

居なくなっていたなんてことはなく、しかし震えながら彼女が体を抱えている。

それに目をやる間も無く、目の前で悲劇が起きる。

「他ならよかったんだがな、他なら」

「す、すみません！しかし目の前に――」

「統率者の名において、結果が全てだ。月小海研究室の一個人よ」

「ひ、やめ――」

血飛沫、転がるのはりんごのような丸い玉と、跳ねる肉塊。

少女が直視していないのが幸か、しかし要も微動だにしない。吐

き気よりも、恐怖が勝っているから。

赤のカーテンから出たそれは、男。紅い水晶の都市を背景に、少女とは真逆の印象を受ける。いやに現実的で、非現実的。なびく髪は薄い茶で、肩に背負うのは異常な長さの日本刀だ。反りの少ないそれを担いだ肩を覆うのは、ただの襟付きの上着と白いシャツ。しかしどちらも赤く染まって、下の色はわからない。

照らされる顔は狂気でも興奮でもない表情で、楠雅とはまた違う鋭い目を持つそののっぺりとした顔は、どこか恐怖を与えてくる。

「で、どうする？」

「嫌だ、知らないけど、嫌だよ」

「そうか、強者だな。お前は」

こちらに正対した彼は、刀の先を地面に付ける。

浅く切れ込みが入った。切れ味の鋭さが一目でわかってしまう。

「どうだ？」

「断る。」

「……………すごいよ、お前は」

あっさりと一人、落としておいてどこか躊躇うようにしている。

時、かばうようにしていた後ろの少女ががたと音を立てた。

それは震えの音、体を抱いている少女が光を放っている。黒、黒、髪に映るのは灰色。

紅い、少しづつ闇色に近づいていく空。その中のガラスの道を黒く塗りつぶす光。

それは一瞬にして、今度は紅く、そして蒼く放たれる。

「ああ、しまったな」

「お、おい、しっかりして！」

要は慌てたように彼女の肩に手を置く、目の前の恐怖を忘れたかのように後ろを向いて。

男は刀を気品ある石畳へ突き刺すと、夕闇色の瞳を爛々と輝かせる。

「楽しくなってしまうな」

彼の懷から、小さなビンが滑り落ちた。それを空いた左手で取り、目の前へ持つてくる。

中には少女の胸にあった宝石と、同じ輝きを持つ液体。そしてそれに浮かぶ石。

それを握りつぶし、手から鮮血を滴らせる。男は口元を歪ませて、血を吹き出させながら笑う。

「これが、奴の言う天上への至りか！生命の旅か！」
おもしろいと彼は言う。

顔を照らす黒と、紅と、蒼と白。

少女の瞳が開かれて、光の量が増える。

天まで昇る黒は、雲を照らし。紅い光は空に消えて。

そして青い光の玉が放たれる。

いくつも、いくつも放たれたそれを見る。

きつと、この街からならどこからでも見られるだろう。天高く昇

る黒い光と、夕焼けを巻き戻す紅い光。そして空へ散らばる青い光。

輝きの中、男は叫ぶ。

「呪いを吐き出せ、希望を降らせ！そして感情すら消え失せるがいい、銀色の殻よ！」

輝きの中、青年は叫ぶ。

「しつかりしろ！何が、何がどうなってるんだよ！」

ただ好奇心で着ただけの、正義も何もない感情論の中から、景色が塗り替えられていく。

奔流の中、涙を流して少女は言う。

瞳は蒼く、透き通っている。星の輝きも、月の癒やしも、太陽の温かさも消え失せてただ光を映す瞳で、要を見て。背に回された手に寄りかかり、傍らの少年に、言う。

「——助けて。」

ただ一言の動詞。何をとは言わない。

光が街を照らして、夕焼けは夜へと変わった。

そこに影は二つだけ。血も人も、生臭い生命の無い塊も、消えて

いる。

あとに残るのは、白銀と黒の二人だけ。
ゆっくりと、暗闇に月が昇る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5421z/>

獣の咆哮

2011年12月18日08時47分発行